



文久2年の「はしか絵」

Some Pictures, " Hashika-e " from 1862 as Historical Materials



富澤 達三 (葛飾区郷土と天文の博物館 専門調査員 / COE調査研究協力者)
TOMIZAWA Tatsuzo

1 あなどれない麻疹

今年、関東地方では若い世代に麻疹が大流行した。4月半ばから5月半ばにかけて、日本大学・上智大学・早稲田大学などで麻疹による休校が相次ぎ、大ニュースとなった。麻疹ウイルスに感染すると約9割が発症するという。約10日の潜伏期を経て、風邪に似た症状ののち38度を超える高熱が出て、赤い発疹が全身に出る。発病すると特效薬はなく、対症療法をしつつ自然治癒を待つしかない。まれに脳炎や肺炎を併発し、重篤化する。

江戸時代には「疱瘡(天然痘)は見目定め、麻疹は命定め」(天然痘は顔にあばたが残り容貌にかかわる。麻疹は命にかかわる。)といわれ、麻疹は20~30年の周期で流行した。特に幕末の文久2年(1862)には多くの死者

を出している。斎藤月岑の『武江年表』によれば、文久2年2月に長崎港の西洋船で麻疹の患者が発生し、3~4月には京都・大坂へ伝染し、江戸でも4月に中国地方の旅から帰った小石川某寺の僧が発症して広まったという。『藤岡屋日記』では、文久2年6~8月にかけて、江戸での麻疹による死者は14,000人を越えたと記している。

2 文久2年の「はしか絵」

文久2年の夏、江戸では麻疹の流行を題材とする時事錦絵「はしか絵」が出版され、現在まで約90点が確認されている。幕末江戸の時事錦絵としては、安政2年(1855)10月の安政江戸地震後に出版された「鯨絵」が有名だが、版元・絵師が不明で無検閲の鯨絵と違い、はしか絵は絵師・版元・改印(検閲年月を示す印)の判明する作品が多い。絵師は作品の多い順に、歌川芳虎・芳盛・芳藤・芳艶・芳幾などとなっている。版元は新興の地本問屋(草双紙・錦絵など、娯楽的出版物の制作・販売業者)が目立つ。改印は「戌四」「戌七」(文久2年4月・7月)の二種にほぼ限られる。版形は大錦(現在のB4版に近い大きさ)の縦絵が多い。

3 はしか絵の絵柄

はしか絵の絵柄は、以下の7つに大別できる。そして、それらを組み合わせて、人目をひき「麻疹除け」と「治療に役立つ」はしか絵が生み出されていった。

麻疹退治を描いたもの

麻疹をもたらず「麻疹神」を抑える効果のある食物や器物・神々が、麻疹神を退治したり、送り出す絵柄である。また、麻疹の流行で「商売あがったり」となった人々が、麻疹神を集団で殴る絵柄もある。

神・英雄などへの祈願を描いたもの

鍾馗・源為朝・半田稻荷の願人坊主・くくり猿などの絵柄である。鍾馗は、中国で疫病を払う神として信仰され、現代日本でも端午の節句に鍾馗の絵を飾る風習が残っている。源為朝は平安時代末の武将で、保元の乱(1156



文久2年の「はしか絵」(歌川芳藤画『麻疹退治シの図』)

年)で敗れ、伊豆大島を経て八丈島に流罪となった。彼の強い肉体と武力は、疫病神すら退散させたという。源為朝は、疱瘡除けと治癒を願う「疱瘡絵」の代表的絵柄だが、疱瘡と同様に発疹を伴う病である麻疹への効力が期待され、はしか絵にも描かれたのだろう。半田稻荷の願人坊主は、疱瘡・麻疹に効く稲荷として信仰を集めた半田稻荷(現、東京都葛飾区)を宣伝した、下級の宗教者である。疱瘡や麻疹除けに効果があるとされた赤色の装束を着て、手には幟や鈴を持っていた。くくり猿は、子供の災厄が「去る」ように願った猿のぬいぐるみである。これらの絵を持っているだけで麻疹よけとなり、罹っても軽く済むと信じられた。

麻疹除けのまじないを描いたもの

当時、麻疹除けに効果があると信じられていたまじない(麻疹除けの歌を書いたタラヨウの葉・馬の飼葉桶をかぶる様子・達磨など)の絵柄。まじない方法を教え、絵が麻疹除けになると信じられた。

麻疹に良い食物・悪い食物を描いたもの

麻疹の際に食べて良い食物・悪い食物を描く。

養生する人々を描いたもの

麻疹療養中の歌舞伎役者、母と子、若い女性などの絵柄である。麻疹から回復しつつある者、治って元気になった者たちの絵柄は、養生の大切さを感じさせ、見る者に希望を与えたと考えられる。

三すくみで時事を諷刺したもの / 諷刺戯画

麻疹で損をした人・得をした人(薬屋・医者)麻疹神や疱瘡神、麻疹が治った人などが三人で話す場面・拳遊びをする姿などを描いている。「三すくみ」で、膠着した状況・三者三様の場面を描くことで、麻疹が大流行する江戸での、人々の利害関係や悲喜こもごもの姿を諷刺している。ほかに歌舞伎の名場面に取材した戯画的な作品もある。江戸庶民は、麻疹で混乱する江戸の様子をちゃかしたはしか絵を見て、つらい世相を笑い飛ばすことで自らを励まし、はやり病の終結を祈ったのだろう。

4 はしか絵の文字情報

多くのはしか絵では、絵の周囲に長い文章が書かれている。文字情報も5つの類型に分けることができる。絵柄同様いくつかの類型を組み合わせ、麻疹除け・治療と養生の情報を伝えている。

A. 麻疹除けの歌・まじない

麻疹除けのまじない(「麦殿は生れたままに、はしかして、かせたるのち八我ミなりけり」など)をタラヨウの

葉に刻んで書いて川に流す・馬の飼葉桶をかぶる・豆や雑穀を混ぜて煎じる、などの呪法が書かれる。

B. 麻疹の食事療法・禁忌

当時の医学書や、民間の医療知識に基づき、麻疹の際に食べて良い食物と悪い食物、慎むべき行為を記す。全てのはしか絵を検討した結果、良い食物は「あづき・いんげん・かんぴょう・大根・長芋・にんじん・ゆり根」が、悪い食物・慎むべき行為には「酒・からいもの・性行為・入湯・灸・髪月代・髪結い」が多く書かれている。

C. 麻疹の病状経過

麻疹の病状経過の概略を記す。発病から12日ほどで快方に向かうとしたものが多く、発病から回復後の養生まで75日間かかるとし、回復後の養生が重要だと説く。

D. 過去の流行年

文久2年以前の、麻疹大流行の年を列挙している。

E. 小噺・戯れ歌

笑いを誘う戯文や小噺。暗い世相を笑い飛ばして人々を明るい気分させ、麻疹退散を願い、勇気づけている。

5 はしか絵の変化

文久2年4月改印のはしか絵の絵柄は「麻疹退治」「神・英雄などへの祈願」が多く、文字情報では「A. 麻疹除けの歌・まじない」などの呪術と「B. 麻疹の食事療法・禁忌」「C. 麻疹の病状経過」が多い。版元たちは江戸での麻疹大流行を予想し、4月改印の麻疹流行期のはしか絵には、麻疹除けとなる呪術的絵柄と、麻疹に良い食物・悪い食物・慎むべき行為に関する合理的な治療情報を載せたと考えられる。

ところが7月改印のはしか絵では、4月改印のものとは比べ、呪術的な絵柄と文字情報は減る。8月頃には江戸の麻疹もピークを過ぎ、版元は「回復後の養生」を勧める絵柄と文字情報を載せたはしか絵へ、内容を変えたと考えられる。また、版元は江戸の人々が麻疹を克服した状況を見て、諷刺的・戯画的なはしか絵を楽しむ余裕が生じたことを察し、7月改印のはしか絵には時事諷刺的・戯画的な面を加味している。

はしか絵は、江戸庶民の日常生活を脅かす大事件に対応して、事件の情報を画像と文字情報で継続的に伝えただけでなく、民俗的知識やまじない・医療情報をも教えた時事錦絵であった。幕府は「当節柄之事」を出版物とし、不特定多数の人々に伝えることを堅く禁じていたが、はしか絵は江戸の麻疹騒ぎを沈静する有用な情報だと判断し、出版を黙認したのだろう。